

語句の多義性の認知的分析と英語教育への応用について

著者	松中 完二
雑誌名	久留米工業大学研究報告
号	41
ページ	173-185
発行年	2019-03-18
URL	http://id.nii.ac.jp/1503/00000265/

〔研究展望〕

語句の多義性の認知的分析と英語教育への応用について

―stay with ～を基に― ⁽¹⁾松中 完二^{*1}

A Cognitive Polysemantic Analysis of “stay with ～” and its Useful Application toward English Language Education

Kanji MATSUNAKA^{*1}

Abstract

The study of polysemantics focuses on the manner in which the meaning of a word and a phrase can change in accordance with the concept being conveyed. As a result, a word and a phrase can be used to convey several concepts with multiple corresponding meanings. However, core sense within the various meanings that a word maintains is a key concept that binds its semantic variations and expansions. In this paper I focus on such polysemic meanings of “stay with ～” as used in English movies by analyzing it in terms of polysemantic structure and cognitive mechanisms.

I found that “stay with ～” can be used in reference to two objects, i.e., people and things. The expression has four basic definitions when used in reference to people: “to coexist,” “to cohabitate,” “to persist,” and “to have a married relationship,” all of which derive metaphorical expansion of meaning from “retention of attention” or “persistence to life.” In the expression’s usage in reference to things, I found one basic definition – “to persist,” – which derives metaphorical expansion of meaning from having a lasting positive effect.

Each meaning is derived from a given situation and concept different from the other based on the core meaning as “the state of being with sb / sth physically or mentally”. In conclusion, I identify implications for the use of these findings in English Language Education.

Keywords : stay with ～, 多義, 認知的記述, 映画の台詞利用

1. はじめに

認知意味論で共通して取られる語の多義性に関する立場は, Lakoff (1987), Sweetser (1990), Taylor (1995) 等が指摘するように, “中心となる意味から非一様な広がりを見せるカテゴリーの拡張” と考えられる⁽²⁾. そして多義の発生には場面の要素が欠かせない. 松中 (1996, 2000, 2001a, 2001b, 2002a, 2002b, 2002c, 2003a, 2003b, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2006a, 2006b, 2007a, 2007b, 2009a, 2009b, 2015, 2016, 2017, 2018) でこれまで日英語の多義現象とその原理の解明にあたってきたが, そこで明らかになったのは語や句の多義性の様々な意味の間の相互関連性を扱う際に多義を生み出す一つまたは複数の中核的な認識が存在し, その他に周辺的な認識が派生するという現実であった⁽³⁾.

そこで, 本稿では意味研究の入り口として一般にも理解を広める目的で, 英語の成句である stay with ～を対象に取り上げ, その多義を生み出す中核的な意味の存在と, その他に周辺的な意味が派生する現実を提示し, その認知原理について解明を試みる.

stay は, Jackendoff (1978) によれば keep, remain とともに「stay 型動詞 (STAY verb)」と呼ばれ, 「be 型動詞 (BE verb)」とは異なった特性を示す. しかしながらその意味と多義構造についての説明は充分ではない. stay with ～は「主体と対象が同じ空間に滞在する」という概念を基に, 幅広い場面で幅広い対象物に対して比喩的に使用されることで多義を形成する. そしてその多義性は, 中心的に共有される概念を基に形成されることが考えられる. しかしながら,

^{*1} 共通教育科
平成30年10月29日受理

stay with ~ の意味認識と多義構造について、言語学的見地からの研究は未だ見られない。

2. 先行研究

ここで先行研究として、多義の扱いについてこれまで言語学の世界で展開されて来た考えをまとめる。

2.1 多義性の原理

多義について論じる際の問題として、多義を生み出す原理の究明があげられる。多義が生じる最大の要因として、「意味の有契性 (semantic motivation)」(Ullmann, 1962) がある。ここで言う有契性とは、語が担う意味とその派生関係に何らかの意義付けが可能であるということである。意味の有契性は、基本的には原義から派生義への拡張に基づいている。多義の拡張の際に意味の有契性が生じると考えられるのは、言語 (意味) の経済性があるからである。語に多義性というものがなく、一語につき一つの意味という原則しか適用され得ないならば、語の数はそれこそ膨大なものとなり、我々の記憶力にとって大きな負担となる (Ullmann, 1951: 49)。そして言葉 (意味) の経済性は「最小努力の法則 (principle of least effort)」(Zipf, 1949) を助ける形で働く。すなわち、一つの語で多くの意味を担うことができれば、話し手、聞き手の双方の努力が最小化され、双方の負担を軽減することができる。

このことは、作動記憶に関する文脈での処理に心的エネルギーを指す処理資源という説明づけでも解明が試みられるが、この点については松中 (2002d, 2004c) で人工知能の意味認識と人間の意味処理の観点で詳しく触れているので、そちらを参照されたい。

2.2 多義の捉え方

Wittgenstein (1958) が指摘するように、意味とは何かを考える場合、意味自体に目を向けるのではなくその使用に注目すべきである。これは元をたどれば Saussure (1916) の langue と parole の区別による規範と言語使用があり、使用者が意味を拡張していくという主張とも通底する。さらに Evans & Green (2006) の「意味は特定のコンテキストにおける言語使用の中から現われる」という指摘にも通じ、認知意味論の分野で一貫して取られる研究姿勢である。

認知意味論の根幹を成す特徴の一つは、言語の様々な側面に関するカテゴリー化の問題に対してプロトタイプの視点を採用したことである。プロトタイプ理論は、成員に段階性を認めた上で、その境界は連続的かつ曖昧なものであるという認識の上に立つ。そしてこうした見方の方が意味の記述的妥当性が高く、実際の人間の物の見方について正しい姿を捕らえることが可能になると主張するのである。この「プロトタイプ理論を」生み出す基盤となったものが、Labov (1973) らによる語の認識の実験結果と共に、Wittgenstein (1953) の「家族的類似 (Familienähnlichkeit, family resemblance)」という現象と Rosch (1975) による色彩の境界を示す語の認識の研究である。Rosch の実験結果は、カテゴリーに属する成員のそのカテゴリーで表される成員「らしさ」を設定し、そこでの意味と認知の関係を明らかにしたという点で大きな発展が見られた。

認知意味論の視点に立った多義研究においては、中心的な意味の記述、分析をどうするかという点に問題が集中する。そのような研究の方向性をまとめると、田中 (1990: 100-102)、鈴木 (2001: 59) の指摘にも見られるように、次の二つの認定の仕方が認められる。

- (1) 理論的プロトタイプ：観察可能性などの、何らかの言語学的基準に基づく典型性の度合い。
- (2) 心理的プロトタイプ：連想喚起力といった、心理学的な基準に基づく顕著さ (salient) の度合い。

認知科学では、多義現象を主にカテゴリーとメタファーという視点から捉え、“人間の五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験の反映”を支えている原理が、メタファー的な認知活動に立脚するものであるとの考えから多義構造を解明しようとする。Sweetser (1990: 18-19) は、語の有契性と派生を支える原理がメタファーによって支えられていると指摘し、多義が時間的推移の中において拡張、形成されつつも、それを支える根本的原理は人間の認知構造にこそあるという見解を示している。

同様に Jackendoff (1997: 29) は、こうした意味認識を「投射された世界 (the projected world)」と名づけ、語の意味とは心的な経験世界、すなわち概念システムであると指摘する。そしてこうした意味の派生関係から得られた言語事象としての意味の集合を記述するのが、辞書における意味記述である。

2.3 英々、英和辞書における意味記述

stay with ~ の多義構造について考えるためには、現実問題として既存の英和辞典における stay with ~ の意味記述に

ついて知る必要がある。そのためここでは、英々、英和辞典において定義されている stay with ~ の意味記述を見ていくことにする。なおここで *New Oxford Dictionary of English 2nd Edition* (NODE) と *Random House English Japanese Dictionary 2nd Edition* (RHD 2(J)) を中心に用いる理由は、次の通りである。

NODE は多義の意味拡張の派生関係が Oxford 系の辞書では初の試みである core sense という中心的な共通認識から派生するという認知的視点を導入して多義の記述を試みている。RHD 2(J) は語義配列の順番を使用頻度順とし、認知的な視点こそ取り入れてはいないものの、語義配列とその派生関係は自ずと中心から周辺へと拡張する形で列挙され、豊富な語義数を誇るためである。特に NODE は core sense という概念を導入して、多義語の根底にある意味の記述を試みている。同辞書では多義記述の姿勢につき、“我々はこの core sense から共通する何らかの概念認識が与えられ、そこから多義が構成されるという考えに立ち、その構造をなるべく具体的に記述するように努めた (pp.ix-x)” とし、その語義配列も頻度的なものとしている。こうした視点は、多義記述が歴史的語義配列に基づく OED, ODE 3, OALD 5, NSOED 4 等の Oxford 系の辞書としては、極めて革新的である。その他歴史的な語義配列としては、Webster 3, AHD 3 があるが、やはりここでも基本義に通じるような意味記述は見られない。また、現代英語の頻度順で多義の語義配列がなされている RHD, RHD 2(J), LDOCE, CED 3, CIDE, COBUILD 2 でも同様であった。そのような中、CED 3 は core meaning という、NODE の core sense に通じる様な枠組みを用いて語の意味記述を試みている。しかし同書の前書き (p.xvi) にもあるように、同書の唱える core meaning とは現代語の意味用法において最も頻度が高く、かつ一般的な認識を指しており、NODE の core sense と同一ではない。実際、同書でも stay with ~ における基本義にあたるような意味記述は見られない。

それぞれの stay with ~ に対する意味記述は次の通りである。

NODE

- stay with ■ remain in the mind or memory of (someone): *Gary's words stayed with her all evening.*
 ■ continue or persevere with (an activity or task): *the incentive needed to stay with a healthy diet.*
 ■ (of a competitor or player) keep up with (another) during a race or match.

RHD 2(J)

stay

[略]

- 2 滞在する、(ホテルなどに) 泊まる ((at, in...)), (人の) 家に泊まる ((with...)): ~ in Paris for a week パリに一週間滞在する / I'm ~ ing with my aunt. おばの家に泊まっています。

[略]

- 4 (競争などに) 持ちこたえる、耐える; (仕事などを) (なんとか) 続ける; (競争相手などに) ついていく、伍 (ゐ) する ((with...)): ~ with the race to the end レースの最後まで頑張る / No rival could ~ with him. 彼に張り合える相手はいなかった。[略]

stay with... (1) v.i.2.

- (2) 〈仕事などを〉続ける、やめない (v.i.4); 〈物を〉使い続ける。
 (3) 〈物・事を〉覚えている。
 (4) ((米話)) 〈事に〉熱中する。
 (5) ((話)) 〈人に〉注意を払い続ける、(嫌でも) 注意深く聞き続ける。
 (6) 〈競争相手に〉伍する (v.i.4) [後略]

* RHD 2(J) において、stay with ~ の (1)~(6) までの意味記述が自動詞の stay の 2 と 4 (v.i.2/v.i.4) と同様であり、ここでは必要な意味だけを抽出するため、1, 3 の語義を省いた。

この結果、stay with ~ の本義的認識は「~ と一緒に滞在する」といったもので、主体が対象となる人物との同居を根幹に置きながら、それが様々に拡張して多義を形成する様子が見て取れる。

RHD 2(J) における (1)~(6) までの語義設定とそこでの意味記述は、先述したとおり stay の自動詞 (v.i.) の 2 と 4 の語義とそこでの意味と同様である。しかしながら、RHD 2(J) の意味記述で幅広い対象とそこでの多義拡張が完全に網羅されているとはいいがたい。

この結果からも、既存の辞書記述では、そうした使用の対象や、その使用対象にあって更に具体的な意味概念と、それを敷衍して形成される多義構造の説明は充分であるとはいいがたい。そこで実際の用例を基に考察をすすめる。こう

した中、『ロングマン英和辞典』（2006）では、英文例に和訳を付した口語を中心とする現実的な用例の豊富さと多義語の見出し語の意味と複数の語義が全体的に把握しやすいような構成と頻度順の語義配列による理解のしやすさが目を引く。Longman's Dictionary of Contemporary English（『ロングマン現代英語辞典』）は、わずか2000語の語彙で55000語の意味を定義している（Johnson-Laird（1983））。しかし stay with ~ の意味記述はわずかに「〈人〉の家に滞在する〔泊まる〕」という記述のみで、今後さらに改良の余地があると思われる。一方『ウィズダム英和辞典 第3版』には、川村も指摘するように“Scotch or bourbon?” “I'll stay with bourbon.” という例文が記載されており、「やっぱりバーボンです」という訳が充てられている。バーボンを飲むということを stay with ~ の心的に寄り添うといったニュアンスで表している点は、stay with ~ の多義的意味をうまくあらわすことに成功している。

英和辞書の役割は訳語の羅列ではない。訳語の暗記だけでは本当の理解、学習とはいえない。また語義の設定も、やみくもに多くの語義を設定するのではなく、豊富な用例から類似する意味の集合でまとめ、互いの語義がコアとなる共通認識から派生して関連付けられるような形を取るのが理想である。そして、それこそが認知意味論的視座に立った研究の成果でもあり、多くの辞書がその編集法とその意味記述において今後目指すべき方向でもあろう。

3. stay with ~ の使用例

ここで、stay with ~ の用例を基に、その多義的使用を列挙する。なお訳語は、紙幅の都合上、発話中の stay with ~ に対応する最低限度意味をなす部分のみを下線部で示す。意味の有契性による多義拡張の原理を説明づけるには、類似する意味の集合による語義設定と、その語義が中心から周辺へと拡張する実際を用例で示し、それを帰納した共時的視点による中心義の設定が不可欠である。その例をここで示す。

3・1 人物に対する使用

3・1・1 人物との共存

- (1) “Are you going to *stay with* us?”

“I want to *stay with* you, honey.”

「パパ、一緒にいてくれる？」

「ああ、一緒にいるよ。」

映画 *Fatal Attraction*

- (2) “Do you want me to *stay with* you?”

“No.”

「一緒にいてあげようか？」

「結構だよ。」

映画 *Rocky V*

- (3) “Will you *stay with* me for a while?”

「少しの間だけ一緒にいてよ。」

映画 *The Firm*

- (4) “Susan, *stay with* me, Susan?”

「スーザン、私と一緒にいてちょうだい。ねえ。」

映画 *City of Angels*

- (5) “Stay.”

“I should go get help.”

“Oh, no. Don't go. The driver went. Please *stay with*..., please *stay with* me. I'm scared.”

「ここにいて。」

「でも助けを呼んで来ないと。」

「お願い、行かないで。助けなら運転手が呼びに行ったから。私と一緒にいてちょうだい。一人じゃ怖いの。」

映画 *City of Angels*

- (6) “*Stay with* me, I'm asking on a bended knee.”

「一緒にいてよ、お願いだから。」

Eighth Wonder, *STAY WITH ME*

- (7) “*Stay with me, darling after all we’ve been through, nobody else can warm you lonely nights, no one gonna love you like I do. Stay with me, can’t you see we’ve got too much to do. Ah, stay with me, stay with me. Baby, please.*”
 「側にいてくれ。これまで色々あったけど、寂しい夜に君を暖め、愛してやれるのは僕以外に他にはいない。行かないでくれ。二人でやるべきことが沢山あるのに、君にはそれが分からないのかい。側にいてくれ。側にいてくれ。頼む、お願いだから。」
 Bobby Caldwell, *STAY WITH ME*

- (8) “Edgar ran off with an old girlfriend. You’re gonna go *stay with* your mom a couple of nights. You’re gonna get over it and decide you’re better off.”
 「エドガーは君を捨てて、昔の恋人と駆け落ちしたんだ。君はこれから数日間、お母さんと一緒に過ごすことになる。そのうちエドガーのことなんて忘れた方が幸せだと気付くだろう。」
 映画 *Men in Black*

3・1・2 人物との滞在

- (9) “Where do I drop you off? Where are you staying? What, the Plaza, the Regency? Give me a name.”
 “I’m *staying with* you.”
 「どこであんたを降ろせばいいんだ？ お泊りはどちらで？ プラザホテルかな、リージェンシーホテルかな？ 泊まるホテルの名前を言ってくれ。」
 「俺はあんたの家に泊まるつもりだ。」
 映画 *The Hard Way*
- (10) “Look, why don’t you get some things packed and you and Dylan come *stay with* me on the base. And you will see that there is nothing to be scared of.”
 「なあ、荷物をまとめてディランと一緒に基地の俺の所に泊まりに来ないか？ そうすれば怖いものは何もないだろう。」
 映画 *Independence Day*

3・1・3 人物への固執

- (11) “Hey, Rock’, watch out!”
 “*Stay with him!*”
 「ロッキー、危ないわ！」
 「相手から離れるんじゃない！」
 映画 *Rocky V*
- (12) “Hmm? Raymond? Do you wanna *stay with* your brother, Charlie, here in Los Angeles or do you wanna go back to Wallbrook? [中略]”
 “Yeah. Yeah, go back to Wallbrook. *Stay with* Charlie Babbit.”
 「どうなんだ、レイモンド？ このロスで、弟のチャーリーと一緒にいたいのか、それともウォールブルックに戻りたいのか、どっちだ？」 [中略]
 「ああ、ああ。ウォールブルックに戻りたい。そして弟のチャーリー・バビットと離れずに一緒にいたい。」
 映画 *Rain Man*

3・1・4 人物との婚姻関係

- (13) “And when it comes to relationships, I’m one hundred percent...I’m one hundred percent monogamous. You *stay with* one guy? Exactly. If I’m with you, then I’m with you. And I don’t want anybody else.”
 「男女関係に関して言えば、あたして100パーセント…100パーセント一夫一婦制を守るタイプなのよ。ずっと一人の男と連れ添うかって？ 勿論じゃない。もしもあなたと一緒にになったら、一生あなたについていくわよ。」
 映画 *True Romance*

3・1・5 注意力の保持

- (14) “Let me ask you something. What is that Wall Street doesn’t have?”
 “What, is this stuff catching? You’re talking in riddles!”
 “No, no, *stay with* me. What is it that Wall Street does not have?”

「一つ聞いていいか？ウォール街にないものといったら何だと思う？」

「何だそれ？謎々か何かか？」

「いいからよく聞け。ウォール街にないものといったら何だ？」

映画 *Die Hard: With a Vengeance*

- (15) “A person would have to be starving to death to ever get involved with a raw oyster, right? He probably had to eat it or die. *Stay with me* Madelyne.”

“Oh, I’m here, I’m here.”

“It was simply, it smelled. It looked like something out of a bad chest cold. So there had to be that moment of truth before he sucked that little slider down, are you *staying with me*?”

“I’m here.”

「そいつは牡蠣を食わなければならない程、よほど腹が減っていたんだろう。分かるか？多分、牡蠣を食って生きるか、牡蠣を食わずに死ぬかのどちらかの選択をしなければならなかったんだ。ちゃんと聞いてくれ, マデリーン。」

「ええ、聞いてるわ。ちゃんと聞いてるわよ。」

「そいつは臭いし風邪をこじらせた時に出る痰のような代物だったろうよ。そのヌルヌルした痰みたいな代物を飲み込む時に躊躇しただろうさ、おい、聞いてるか？」

「聞いてるわよ。」

映画 *Daylight*

3・1・6 生への執着

- (16) “No. No! Frank! Frank! *Stay with me*, Frank! *Stay with me*! Come on, Frank, *stay with me*. *Stay with me*, baby, *stay with me*. Come on.”

「いや。いやよ、フランク。フランクったら！死んじやいや！フランク！死なないで！お願い、フランク、しっかりするのよ, しっかりして。大丈夫よ。」

映画 *The Bodyguard*

- (17) “No. No, *stay with me*. Stay here. Please. Joseph. No, no, Joseph, look at me.”

「ダメ。ダメよ。死なないで。頑張るのよ。お願い、ジョセフ。いやよ、そんなの。しっかり私を見て。」

映画 *Far and Away*

- (18) “*Stay with me*! *Stay with me*!”

「気をしっかり持って！気を確かに！」

映画 *Antichrist*

- (19) “Come on George. *Stay with us*, George. *Stay with us*.”

「頑張って、ジョージ。しっかりするのよ。ジョージ、しっかりして。」

映画 *Daylight*

- (20) “Stay awake now. *Stay with us*.”

「今眠っちゃダメよ。ちゃんと起きてなさい。」

映画 *Daylight*

3・2 事物に対する使用

3・2・1 対象物への固執

- (21) “Indy!”

“*Stay with the Ark*. *Stay with the Ark*!”

「インディ！」

「アークから離れるな。アークの側にいろ！」

映画 *Raiders of the Lost Ark*

- (22) “*Stay with it*, Joseph!”

「(馬に) しっかりつかまってなよ, ジョセフ！」

映画 *Far and Away*

3・2・2 対象物への愛着

- (23) “Would you stop with the hair in my drink already? I’m moving to Chasen’s. I’m moving my whole office to

Chasen's."

"Oh, *stay with* the Brown Derby."

「飲み物に髪の毛を入れるの、そろそろやめてもらえないかな。俺は今度からチェイسن（ビバリーヒルズにある高級レストラン）の常連になるぞ。仕事場もそっちに移すしな。」

「どうか、うちのブラウン・ダービーレストランを今のまま変わらずひいきにして下さい。」

映画 *Guilty by Suspicion*

(24) "Scotch or bourbon?"

"I'll *stay with* bourbon."

「スコッチにしますか、バーボンですか。」

「やっぱりバーボンです。」

『ウィズダム英和辞典 第3版』

3・3 状況に対する使用

(25) "*Stay with* the job till it's finished."

「仕事が完成するまでがんばって続けなさい。」

RHDS

(26) "*stay with* the race to the end."

「レースの最後までがんばる。」

『小学館プログレッシブ英和中辞典』

(27) "He *stayed with* the lecture until he lost patience."

「講義につき合っていたもののとうとう我慢がしきれなくなった。」

『小学館プログレッシブ英和中辞典』

(28) "*stay with* a program."

「あくまでも計画を進める。」

『研究社 新英和大辞典 第5版』

ここでの用例は極力台詞に語らせ、その背景場面の説明は省いた。というのも、無数に展開される場面を逐一言葉で説明しても冗長になるだけだからである。また stay with ~ は「3・1・6 生への執着」で顕著のように、前後の会話なしで独立して用いられることが珍しくない。そのため文脈と場面の補足説明を加味して、十分に意味理解が可能となるよう努めた。

そしてそれ以上に理解を助けるものが、意味の類似性の集合によってまとめた語義設定の有効性である。現実の発話から採集した用例と、その意味の類似性の集合によるここでの語義設定が決定的外れでも、独断によるものでもない。言語学的に多義を扱う際の一番の問題は、こうした異なる語義を結び付ける意味の有契性と、その有契性によって成立する多義を生み出す中核的な認識をいかに有効に説明付けられるかという点に尽きる。

4. 分 析

4.1 stay with ~ の中心的な認識と多義構造

以上の用例採集の結果、stay with ~ の使用対象には、「人物」、「事物」、「状況」の三つの認識が存在することを明らかにした。これらの全ての認識の根幹で共通する stay with ~ の中心的な認識は、おおよそ「主体と対象物が精神的に結びついて空間的・時間的に共存している状態」と記述出来る。

こうした中心的な認識とそれを基に形成される stay with ~ の概念構造を図示すれば、Fig. 1 のようになる。

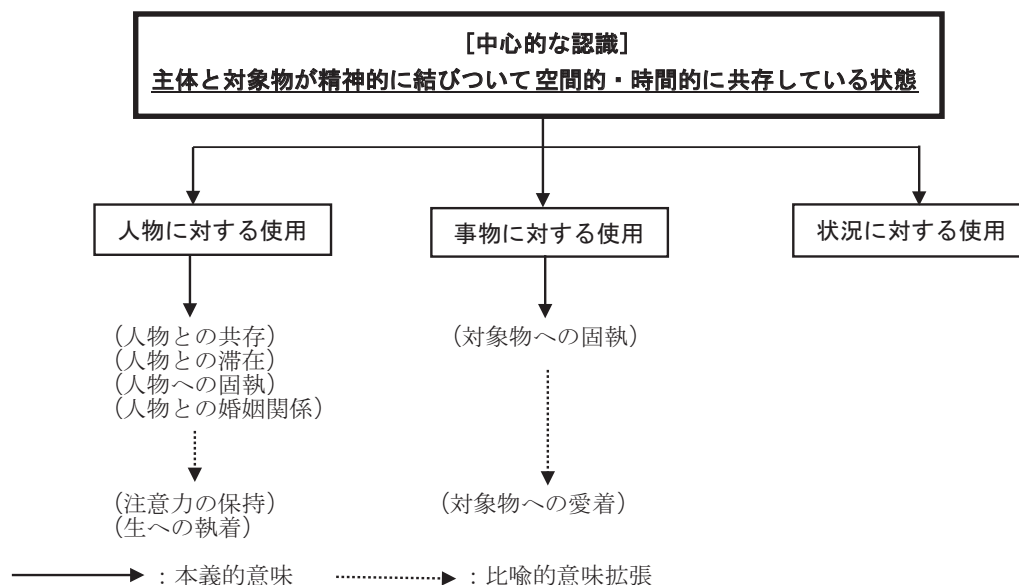


Fig. 1

4.2 stay with ~ の概念認識図

そして, stay with ~ のこうした多義を支える中心的な認識の概念構造を図示すれば, Fig. 2 のようになる.

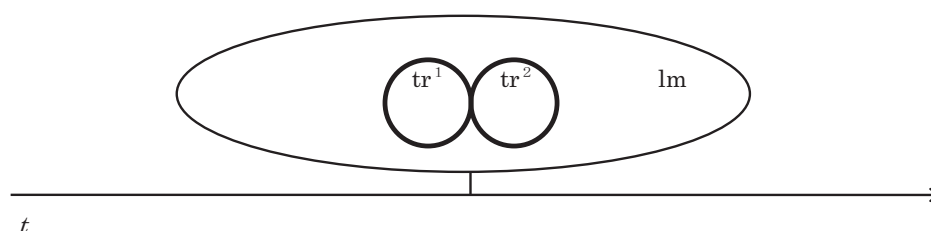


Fig. 2

ここでは, 背景的環境である landmark (lm) の中において, 主体である trajectory1 (tr^1) と対象物である trajectory2 (tr^2) が, time (t) の時間軸に沿って互いに並存している状態を表わしている. lm を生活空間として捉えれば, 主体と対象人物との同居という本義的な認識となる. 一方, 主体が置かれたメンタル・スペースにおける対象物との並存として捉えれば, それぞれの文脈により, 対象物への固執や生死の境での生への固執といった比喩的認識を生む. この認識を基に, イメージ・スキーマ的な転用により, stay with ~ は多義を形成する. tr^2 が存在しているのが「この世」ならば stay with me で「死なないで」となり, tr^2 が存在しているのが「相手との会話の場」ならば「ちゃんと聞く」となる. 多くの英和辞書に見られるように, stay with ~ の異なる語義をただ羅列するだけでは, 多義における語義の意味の有契性による説明がつかない. 中心的な認識として「主体と対象物が精神的に結びついて空間的・時間的に共存している状態」という記述を採用すれば, 広範な語義のつながりと拡張を説明でき, 中心的な認識こそが stay with ~ の意味であると考えられる. またこの記述が現在の認知的視点による意味理解につながり, そうした認知的視点を取り入れた辞書記述の例として有効なのではないだろうか.

そして stay with ~ のこうした多義は, そもそも stay の中心的な概念を「人や物が動いたり変化したりしないで同じ場所, 状態にとどまり続けること」として捉えれば, 比較的容易に理解されえる. いずれにしても, 多義の異なる意味とその拡張の理解を助けるのは中心的な概念を認めることであり, その記述の有効性である. 今回のように stay with ~ の中心的な認識を記述すれば, 人物との同居という意味認識以外にも拡張する多義の広がりがあり説明付けられ, 人物との同居から精神的な部分にまで拡張し, 「相手に寄り添う」といった認識にまで拡張して多義が形成されることが理解しやすくなるのではないだろうか. そしてそこから辞書記述の可能性も広がり, 果ては英語学習における単語の質的な意味理解にもつながる可能性が期待される.

5. ま と め

stay with ~ は、「主体と対象物が精神的に結びついて空間的・時間的に共存している状態」という中心的な認識を基に、「人物」、「事物」、「状況」の三つに対して使用される。そして「人物に対する使用」からは“人物との共存”、“人物との滞在”、“人物への固執”、“人物との婚姻関係”といった本義の意味を基に、そこから“注意力の保持”、“生への執着”という比喩の意味への拡張が見られることを明らかにした。また「事物に対する使用」からは、“対象物への固執”という本義の意味を基に、“対象物への愛着”という比喩の意味への拡張が見られることを明らかにした。こうした中心的な認識から下部概念への拡張は、Jackendoff (1997: 29) の言う「投射された世界 (the projected world)」において、Fauconnier (1997: 8) の言う「人間の精密な認知構築や解釈を通して映し出された言語表現」に他ならない。言語学はどこまでも純粋に言語の科学の発見に重点を置く学問である一方、そこで得られた成果を辞書編纂や教育に取り込むことは必然的要請である。

言語学で得られた成果を学校での英語教育に活用する努力は、安井 (1973) に代表されるように、これまでも少なからず試みられてきた。しかしながら映画を用いた語の多義的使用とその理解という側面に限って見ればわずかに谷口 (2012) だけであり、それを除けばほとんど未開拓の分野であると言っても過言ではない。有働 (2012: 32) も指摘するように、言語学の学術的成果は、学校での英語教育において積極的に応用、活用されるべきものである。Boars & Lindstromberg (2006) も指摘するように、多義語の意味研究は、第二言語、外国語の習得研究ならびに教育にとりわけ貢献度が高いと考えられる。その利点として、1) 単なる訳語の暗記から意味の理解に導く授業実践へとつながる。2) 小谷 (2012: 53) の指摘にもあるように、映画そのものが口語英語の教材となると同時に言語研究のデータベースとなり、更にはそのままリスニングの訓練に直結する。3) 英語学習に興味を持つ学生でさえ、訳語の暗記と意味の理解を勘違いしたまま意味とは何かということを教えない現状の英語教育は不十分であり、こうした提言と実証により更なる知的刺激の向上と学習の促進に役立つ可能性を秘めている。ただし瀬戸 (2018)⁽⁴⁾ も指摘するように、多義記述に常に伴う問題点が二つある。すなわち、①中心義の設定、②主観性の問題、の二つである。この二つを解決し、言語科学としての客観性を求めるために意味の類似の集合によってまとめ、現実の用例から帰納した結果としての意味の確立に、用例に日常言語の反映である映画の台詞を用いるのである。

松中 (2017) でも指摘したように、映画の台詞を意味研究における言語資料として扱うメリットは、それが口語で人為的なものである点を認めるとしても、例文という形で言語資料としての有益性の向上である。その発展形の一つが、英和辞書における意味記述のあり方にも有効な成果が期待できる。多義の意味説明には辞書における意味記述が現実的なものである。しかしながら、Gibbs, Jr. (1994) も述べるように、辞書の定義が出来ることはせいぜい新しい語を読み手が経験に基づいて知っていると推定される別の語と結びつけることによって、意味を仲介することに過ぎない。しかしながらこうした限界にもかかわらずいくつかの辞書が成功したのは、英語の語の多くが定義可能であるという可能性の証になっている。辞書によって与えられた定義の全てが適切なものとは限らないだろうが、それでも辞書は有用なものであり、学習者にとって便利な機能を果たしているのは間違いない。訳語の単なる暗記から脱却し、語句の真の意味理解の促進が期待される。これこそが映画の台詞を用いた実証と意味論的研究の融合の理想的な形であり、どのような形であれ本試論がその一助となれば、これ以上の喜びはない。

謝 辞

本稿の執筆に際しては、金沢星稜大学人文学部国際文化学科の川村義治教授よりご専門の認知意味論、多義研究の立場から専門的かつ有益なコメントをいただいた。ここに記して深謝申し上げる。言うまでもなく、本稿における一切の責は筆者の私にある。

注

- (1) 本論文は映画英語教育学会第15回西日本支部大会 (2018年3月3日、於：大阪工業大学) において研究発表した内容に加筆、修正を施したものである。また本研究は、2018年度久留米工業大学学長裁量費による教育研究費の助成を受けた研究成果の一部である。
- (2) Lakoff (1987) は、「女」、「火」、「危険な物」という全く別個の事象が、我々の認識においては同様のものとして位置付けられる傾向があり、そうした認識を支えている原理は何か、という部分にメタファーというメスを入れる。われわれが意味認識

に際して、その根本的な部分で共有し、そのカテゴリーの成員として最も典型的な意味認識を、認知言語学では“プロトタイプ”と呼び表す。

- (3) これと同様の指摘は、Colombo & Flores (1984) にも見られる。また Allerton (1979: 51) は、同音異義と多義を識別する基準は、共通の意味的中核部分の存否によると述べ、paper の多義性を例にあげる。paper は「紙」、「新聞」、「論文」、「公文書」といった多義性を有するが、その共通の意味的中核部は、「公的かつ重要な内容の文書で、紙に書かれ印刷されたもの」とされると主張する。そしてこの意味的中核部を共有することで、paper の異なる複数の意味が一つの語に収まると述べ、本稿の主張点と通じる記述が見られる。同様に Cruse (2000: 109-110) では、多義の意味構造は線的 (linear) な関係によって結び付けられるという見解を示している。この見解は、多義が一つの共通認識に還元されるという本稿での姿勢と通じるものである。
- (4) 瀬戸賢一 (2018) 「多義記述の問題点とその解法—日本における正しい多義記述の出発点—」『日本認知言語学会 第19回全国大会シンポジウム 多義をどう捉えるか—言語教育と理論の視点から—』予稿集。

参考文献

- Allerton, D. J. (1979). *Essentials of Grammatical Theory: A Consensus View of Syntax and Morphology*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Boars, F. & Lindstromberg, S. (2006). Cognitive Linguistic Applications in Second or Foreign Language Instruction: Rationale, Proposals, and Evaluation. In *Cognitive Linguistics: Current Applications and Future Perspectives*. pp. 305-358. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Colombo, L. & Flores, G. (1984). The meaning of Dutch prepositions: A psycholinguistic study of polysemy. In *Linguistics* 22. pp. 51-98. The Hague: Walter de Gruyter.
- Cruse, D. A. (2000). *Meaning in Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Evans, V. & Green, M. (2006). *Cognitive Linguistics: an introduction*. Mahwah, NJ: Laurence Erlbaum Associates.
- Fauconnier, G. (1997). *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibbs, Jr., R.W. (1994). *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press. (辻幸夫, 井上逸兵監訳. (2008). 『比喩と認知—心とことばの認知科学—』研究社.)
- Jackendoff, R. (1978). Grammar as Evidence for Conceptual Structure. In Halle, M., Bresnan, J. & Miller, G. E. eds. (1978). *Linguistic Theory and Psychological Reality*. pp. 201-228. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997). *The Architecture of the Language Faculty*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Johnson-Laird, P. (1983). *Mental Models: Towards A Cognitive Science of Language, Inference, and Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press. (AIUEO 訳. (1988). 『メンタルモデル：言語・推論・意識の認知科学』産業図書.)
- 小谷早稚江. (2012). 「映画で見つける Native 特有の英語表現と言語学的分析 —Contrastive Focus Reduplication について—」『最新言語理論を英語の教育に活用する』pp. 53-62. 開拓社.
- Labov, W. (1973). "The boundaries of words and their meanings." In Bailey, C. J. N. and Shuy, R. W. eds. (1973). *New Ways of Analysing Variation in English*. pp. 340-373. Washington: Georgetown University Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R.W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar. vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- 松中完二. (1996). 「GAME という英語とそれに対する日本語の意味」全国大学国語国文学会編『文学・語学』第151号, pp. 12-24. おうふう.
- 松中完二. (2000). 「edge の概念構造と多義の意味認識について —認知的視点から—」英語語法文法学会編『英語語法文法研究』第7号, pp. 135-150. 英語語法文法学会.
- 松中完二. (2001a). 「through の概念構造についての認知意味論的考察 —その多義構造とメタファーの意味認識について—」日本英語学会編『JELS 18』pp. 121-130. 日本英語学会.
- 松中完二. (2001b). 「forget の概念認識と多義的使用について —認知的視点から—」日本英語表現学会編『英語表現研究』第18号, pp. 10-18. 日本英語表現学会.
- 松中完二. (2002a). 「develop の原義と多義の意味派生について —原義の設定と多義的有契性についての認知的分析—」日本英語学会編『JELS 19』pp. 206-215. 日本英語学会.
- 松中完二. (2002b). 「現代の多義語の構造」佐藤武義・飛田良文編『現代日本語講座 第4巻 語彙』pp. 129-151. 明治書院.
- 松中完二. (2002c). 「game の概念カテゴリーと多義性についての認知的考察」日本認知言語学会編『日本認知言語学会論文集』第2巻, pp. 23-33. 日本認知言語学会.
- 松中完二. (2002d). 「認知的言語研究の実践者としての九鬼周造」敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第62号, pp. 67-100. 敬愛大学.

- 松中完二. (2003a). 「英和辞書における意味記述と訳語の隙間 —good の訳例に見る意味認識と訳語生成の創造的側面について—」 国際基督教大学比較文化研究会編『ICU 比較文化』第35号, pp. 127-145. 国際基督教大学.
- 松中完二. (2003b). 「business の多義の意味認識について —多義の意味的有契性に対する認知的考察—」 敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第8号, pp. 21-58. 敬愛大学.
- 松中完二. (2004a). 「語の多義の意味拡張についての認知的考察 —「山」の場合を基に—」 編集委員会編. (2004). 『日本語教育学の視点』 pp. 380-394. 東京堂.
- 松中完二. (2004b). 「「甘い」と“sweet”の意味拡張についての認知的考察 —共感覚表現の身体性から—」 金沢星稜大学人間科学研究所編『telos』第37号, pp. 17-63. 金沢星稜大学.
- 松中完二. (2004c). 「意味認識の原理についての認知的考察 —「場面」と「文脈」の観点から—」 敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第66号, pp. 51-98. 敬愛大学.
- 松中完二. (2005a). 「thing(s)の意味認識について」 日本認知言語学会編『日本認知言語学会論文集』第5巻, pp. 375-385. 日本認知言語学会.
- 松中完二. (2005b). 『現代英語語彙の多義構造 —認知論的視点から—【理論編】』白桃書房.
- 松中完二. (2006a). 『現代英語語彙の多義構造 —認知論的視点から—【実証編】』白桃書房.
- 松中完二. (2006b). 「語の多義の意味拡張についての認知的考察 —live with ~の場合を基に—」 敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第11号, pp. 153-174. 敬愛大学.
- 松中完二. (2007a). 「justice の概念認識と多義の意味拡張について —認知的視点から—」 敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第12号, pp. 85-101. 敬愛大学.
- 松中完二. (2007b). 「語の多義の意味拡張とイメージ・スキーマについて —belong の場合を基に—」 敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第12号, pp. 103-124. 敬愛大学.
- 松中完二. (2009a). 「「ひく」の意味論 —多義と認知の接点—」『日本近代語研究 5 —近代語研究会25周年記念—』 pp. 35-56. ひつじ書房.
- 松中完二. (2009b). 「固有名詞の意味解釈について —「連想」と「百科事典的知識」の観点から—」 敬愛大学経済文化研究所編『経済文化研究所 紀要』第14号, pp. 117-139. 敬愛大学.
- 松中完二. (2015). 「固有名詞の意味理解と異文化理解について —「参照点構造」を基に—」 映画英語教育学会編『映画英語教育研究』第20号, pp. 95-108. 映画英語教育学会.
- 松中完二. (2016). 「洋画の台詞における人名の意味理解と英語教育の可能性について」 映画英語教育学会編『映画英語教育研究』第21号, pp. 169-182. 映画英語教育学会.
- 松中完二. (2017). 「語句の認知的多義研究と映画の台詞利用の有用性について —one of ~を基に—」 映画英語教育学会編『映画英語教育研究』第22号, pp. 201-213. 映画英語教育学会.
- 松中完二. (2018). 「語句の多義性と映画の台詞利用の有効性について —get away with ~を基に—」 映画英語教育学会編『映画英語教育研究』第23号, pp. 69-81. 映画英語教育学会.
- 初山洋介. (2001). 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」 山梨正明他編. (2001). 『認知言語学論考 No. 1』 pp. 29-58. ひつじ書房.
- Putnam, H. (1975). The meaning of “meaning”. In *Philosophical Papers: Vol.2. Mind, Language, Reality*. pp. 215-271. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosch, E. (1975). Cognitive Representations of Semantic Categories. In *Journal of Experimental Psychology: General* 104. pp. 192-233. London: Academic Press.
- Saussure, F. de. (1916). *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot. (小林英夫訳. (1972). 『一般言語学講義』 岩波書店.)
- 定延利之. (2000). 『認知言語論』 大修館書店.
- 瀬戸賢一. (1986). 『レトリックの宇宙』 海鳴社.
- 瀬戸賢一. (1997). 「拡大するメトニミー —認知言語学の問題点—」 *Kansai Linguistic Society* 17 (Proceedings of the Twenty-First Annual Meeting), pp. 67-77. 関西言語学会.
- 瀬戸賢一. (2018). 「多義記述の問題点とその解法 —日本における正しい多義記述の出発点—」 日本認知言語学会編. 『日本認知言語学会 第19回全国大会予稿集「シンポジウム 多義をどう捉えるか —言語教育と理論の視点から—」』 p. 221. 日本認知言語学会.
- 鈴木智美. (2001). 「多義語の意味に関わる二つのネットワーク構造 —“心理的プロトタイプ” 度の高さを位置付ける—」『日本言語学会 第122回大会予稿集』 pp. 59-64. 日本言語学会.
- Sweetser, E. (1990). *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 田中茂範. (1990). 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』 三友社.
- 谷口一美. (2012). 「学習に有効なイメージ・スキーマと多義ネットワークの構築にむけて」『最新言語理論を英語の教育に活用する』 pp. 176-187. 開拓社.
- Taylor, J. (1995). *Linguistic Categorization 2nd ed.* New York: Oxford University Press.
- 有働真理子. (2012). 「言語学の知見を学校英語教育に活用するということ」『最新言語理論を英語を教育に活用する』 pp. 24-33. 開拓社.

- Ullmann, S. (1951). *Words and their Use*. London: Muller.
- Ullmann, S. (1962). *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell.
- 山梨正明. (1988). 『比喩と理解』東京大学出版会.
- 安井 稔. (1973). 『英語教育の中の英語学』大修館書店.
- Zipf, G. K. (1949). *Human Behavior and the Principle of Least Effort*. Cambridge: Addison-Wesley.
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophische Untersuchungen*. Oxford: Basil Blackwell. (藤本隆志訳. (1976). 『ウィットゲンシュタイン全集 8 哲学探究』大修館書店.)

辞 書※ [] 内は本文中での略称を表す

- Albert, S. H. & Sally W. ed. (1995). *Oxford Advanced Learner's Dictionary 5th ed.* Oxford University Press. [OALD 5]
- Collins UK & Mark F. (1994). *Collins English Dictionary 3rd ed. updated.* HarperCollins Publishers. [CED 3]
- Henry, H. Jr C. & Harper, C. et al. (1995). *Collins COBUILD English Dictionary*. Harper Collins Publishers. [COBUILD 2]
- Houghton Mifflin Company. (1994). *The American Heritage Dictionary of the English Language 3rd ed.* Houghton Mifflin Company. [AHD 3]
- 井上永幸・赤野一郎編. (2012). 『ウィズダム英和辞典 第3版』三省堂.
- Jess, S. ed. (1973). *The Random House Dictionary of the English Language (School Edition)*. Random House. [RHDS]
- Judy, P. & Patrick, H. ed. (1998). *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford University Press. [NODE]
- 小稲義男編集代表. (1980). 『研究社 新英和大辞典 第5版』研究社.
- 小西友七・安井稔・国広哲弥編集主幹. (1980). 『小学館 プログレッシブ英和中辞典』小学館.
- Lesley, B. & OUP ed. (1993). *The New Shorter Oxford English Dictionary 4th ed. vol. 1 A-M*. Oxford University Press. [NSOED 4]
- Oxford Dictionaries. ed. (1995). *Oxford Dictionary of English 3rd Edition*. Oxford University Press. [ODE 3]
- Paul, P. (1995). *Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge University Press. [CIDE]
- ピアソン・エデュケーション. (2006). 『ロングマン英和辞典』桐原書店.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典第2版編集委員会編. (1994). 『ランダムハウス英和大辞典 第2版』小学館.
- Stephen, B. ed. (2006). *Longman Dictionary of Contemporary English 3rd ed.* Longman Group Ltd. [LDOCE]
- Stuart, B. F. ed. (1987). *The Random House Dictionary of the English Language 2nd ed. unabridged*. Random House. [RHD 2]
- Victoria, N. & David, B. G. ed. (1988). *Webster's New World Dictionary of American English 3rd College ed.* Simon & Schuster Inc. [Webster 3]

歌 謡 曲

- Bobby Caldwell, *STAY WITH ME* (1987). Song & Lyrics written by Bobby Caldwell
- Eighth Wonder, *STAY WITH ME* (1985). Lyrics written by Geoffrey B. & Patricia K.

映画 DVD

- Adrian, L. (Director). (1987). *Fatal Attraction* [Motion picture]. United States: Paramount Pictures.
- Avildsen, J. G. (Director) & Stallone, S. G. (Writer). (1990). *Rocky V* [Motion picture]. United States: United International Pictures.
- Barry, S. (Director), & Ed, S. (Writer). (1997). *Men in Black* [Motion picture]. United States: Columbia Pictures Industries Inc.
- Cohen, R. (Director) & Bohem, L. (Writer). (1996). *Daylight* [Motion picture]. United States: Universal Pictures.
- Emmerich, R. (Director) & Devlin, D. (Writer). (1996). *Independence Day* [Motion picture]. United States: Twentieth Century Fox Film Corporation.
- Howard, R. W. (Director) & Dolman, B. (Writer). (1992). *Far and Away* [Motion picture]. United States: Universal Pictures.
- Jackson, M. (Director) & Grant, S. (Writer). (1992). *The Bodyguard* [Motion picture]. United States: Warner Bros. Entertainment, Inc.
- John, B. (Director), & Pyne, D. & Dobbs, L. (Writer). (1991). *The Hard Way* [Motion picture]. United States: Universal Pictures.
- John, M. (Director), & Jonathan, B. H. (Writer). (1995). *Die Hard: With a Vengeance* [Motion picture]. United States: Twentieth Century Fox Film Corporation.
- Levinson, B. (Director) & Morrow, B. & Bass, R. (Writer). (1988). *Rain Man* [Motion picture]. United States: United International Pictures.
- Pollack, S. I. (Director) & Rayfiel, D. & Towne, R. & Rabe, D. (Writer). (1993). *The Firm* [Motion picture]. United States: Paramount Pictures.
- Scott, T. (Director) & Tarantino, Q. J. (Writer). (1993). *True Romance* [Motion picture]. United States: Warner Bros. Entertainment, Inc.

-
- Silberling, B. (Director) & Stevens, D. (Writer). (1998). *City of Angels* [Motion picture]. United States: Warner Bros. Entertainment, Inc.
- Spielberg, S. A. (Director) & Kasdan, L. E. (1981). *Raiders of the Lost Ark* [Motion picture]. United States: Paramount Pictures.
- Trier, L.von. (Director & Writer). (2009). *Antichrist* [Motion picture]. Denmark, Germany, France, Sweden, Italy, Poland: Zentropa Productions.